

A-1 教科と連携した総合的学習

◎教科と連携した総合的学習

1 自力解決に必要な教科の資質・能力の明確化と育成

教科と連携した総合的学習を展開する際に必要な資質・能力とは、各教科の学習で育成される資質・能力である。したがって、その資質・能力を各教科別に明確にし、日々の教科学習の実践において育成することが望まれる。

(1) 国語科で育成すべき資質・能力

① 「要約する」資質・能力

(2) 社会科で育成すべき資質・能力

① 「社会事象相互の関係を考える」資質・能力

② 「自分の生活とのかかわりで考える」資質・能力

③ 「情報を収集・処理する」資質・能力

(3) 算数科で育成すべき資質・能力

① 「類推的に考える」資質・能力

② 「発展的に考える」資質・能力

③ 「一般化してとらえる」資質・能力

④ 「統合的に考える」資質・能力

(4) 理科で育成すべき資質・能力

① 「見通しを持つ」資質・能力…各学年共通

② 「比較しながら調べる」資質・能力…3年生

③ 「要因を関係づけながら調べる」資質・能力…4年生

④ 「条件に目を向けながら調べる」資質・能力…5年生

⑤ 「多面的に思考し追究する」資質・能力…6年生

2 育成する資質・能力の明確な位置づけ

総合的な学習の時間の単元と教科の単元との間に内容的な関連があれば、そこには類推的に考える資質・能力が発揮され、教科で身につけた技能や知識が役に立つことになる。また、総合的な学習の時間の追究過程で生まれた課題が、内容的に関連のある教科学習へと発展することも考えられる。総合的な学習の時間の年間計画を立案する際には、このような連携のさせ方を明確に位置づける。

また、内容的な関連がなかったとしても、資質・能力は発揮されるはずである。そこで、総合的な学習の時間のどの場面で、どの教科のどんな資質・能力が生かされるのかを考えて、それらを生かす場面を、総合的な学習の時間の展開すなわち単元構成や本時案に明確に位置づけていくことが必要である。その際、位置づける資質・能力の数をあまり多くしないようにする。目安としては、4～5時限に1つ、あるいは単元の各次につき2つ程度が望ましいと考える。

3 教科の資質・能力を生かす場の設定

各教科で資質・能力を育成し、総合的な学習の時間の展開の中で生かされるであろうと想定したとしても、それらが確実に生かされるとは限らない。そこで、各教科の特性を必要とする場面を意図的に設定することで、教科の資質・能力を生かしていく。具体的には、以下のような場である。

(1) 国語科：論理的に構成する必要感を感じさせる場

国語科の学習指導要領には、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域ともに、第1学年及び第2学年では「順序」、第3学年及び第4学年では「中心」や「段落相互の関係」、第5学年及び第6学年では「目的や意図」、「内容や要旨」などに指導の重点を置く目標が示されている。これらの文言は全て、筋道を立てて論理的に思考したり、要約したりということをめざすものである。また、本校で育成をめざしている「要約する」資質・能力も論理的に整理する力である。したがって、総合的な学習の時間の中で、交流・対話・プレゼンテーションといった論理的に構成する必要感を感じさせる場を設定することで、その資質・能力が生かされ、さらに育成されていくのである。

(2) 社会科：因果関係を考える必要感を感じさせる場

目の前に見える事象（結果）とそのことが生起する原因との関係を明確にしていくことが社会科の特性であると考えられる。すなわち、因果関係である。総合的な学習の時間の追究過程で何らかのトラブルが生じた時、いくつかの事象の因果関係を明らかにすることで、解決策が見えてトラブルが解消したり、次の追究課題が明確になったりする。総合的な学習の時間をスムーズに進めることだけに主眼を置くのではなく、そんな場面を意図的に取り入れていくことが、社会科の資質・能力を生かすこととなり、さらには子どもたちに「段取りよく解決していく力」を育成するのであると考えられる。

(3) 算数科：条件や場面を変えて考える必要感を感じさせる場

算数科の特性として「条件や場面を変えて考える」ということがある。算数科では、「問題の条件や場面を変えてみることで、物事を固定的なものと考えず、絶えず新しいものに創造し、発展させようとする考え方、すなわち“発展的に考える”資質・能力を育成する。」と述べた。つまり、総合的な学習の時間における問題解決の場面で、条件や場面を変えて考える必要感を持たせることで「発展的に考える」資質・能力が生かされるのではないかということである。その中で「条件をゆるめる」ことで、ばらばらに見えていた個々の事象が統合されたり、きまりを見出すことで一般化されたりということもある。つまり、「統合的に考える」資質・能力や「一般化してとらえる」資質・能力が発揮されることも可能となると考える。

(4) 理科：実証性・再現性・客観性を持たせる必要感を感じさせる場

理科の本質として「子どもの持った素朴概念を、実証性・再現性・客観性という特性を持った、より科学的な概念へ高める」ということがある。総合的な学習の時間の問題解決の場面において、例えば子どもたちが、自分たちの考えには客観性が足りないと感じたときに、理科の資質・能力が生かされ、その考えはより科学的な概念となり、問題解決されていくのではないかと考える。したがって教師側から述べると、客観性を高めなければならないという必要感を持たせることが大切である。

このように、総合的な学習の時間の中で、子どもたちが教科で育成された資質・能力を生かして問題解決していく。それが、本校の言う「教科と連携した総合的な学習の時間」のあり方であり、そうすることで教科の資質・能力もさらに育成されると考える。

